

## 世阿弥と禅文化とのかかわり

——「又云」「無中に道あつて……」などに触れつつ——

重田みち

世阿弥伝書には、「又云」という表現が十例

近く見える。この表現は、表章氏によって以前から注目されている。氏は、世阿弥が伝書の「論旨転換部の冒頭にしばしばこの句を置いて」おり、「後に追加された感じの強い補説的な記事の頭にある事が多い」(『世阿弥 禅竹』補注一一)と述べておられる。ただし氏は「又云」を「公案」など後年になつて用いられた禅とかかわりの深い表現の類と見ておられるわけではなく、「又云」が用いられている箇所では、「増補」であるとの推定をされていない箇所もある。しかし筆者は、「又云」という表現自体、世阿弥が禅文化とのかかわりの中で用いるようになったものと考ええる。世阿弥と縁の深い書の中で、歌道関連の書である良基の連歌論等にはこの表現が見られないのに対し、禅僧の撰述に係る『碧巖録』・『人天眼目』(後述)、また日本の『夢中問答集』等には「又曰」「又云」が散見される。もつともこの表現は中国の経書(儒書)の注釈に多用されており、そちらが先行することは疑いを

容れない。

そしてこのことから、世阿弥伝書の「又云」の表現で始まる一連の部分十箇所近くが、すべて世阿弥が禅僧と親しく交流を持つようになつてから、すなわち禅文化を愛好した足利義持の統治が始まる応永十五年以降に書かれたと推測される。従来「増補」説がなかった(または説が控えられていた)『花伝』の当該部分も、みな後に書き加えられたものである。各例の詳細は別の機会に譲るが、ここでは当該部分だけを次に簡単に挙げておく。

- 1、「又云、物まねなれども、心得べき事あり。物狂は憑物の本意を狂ふといへども、女物狂などに、あるひは修羅鬪諍・鬼神などの憑く事、なによりも悪き事也。(中略)この公案を持つ事、秘事也」(物学「物狂」)
- 2、「又云、嵩は一さいにわたる義也」(問答第六条)
- 3、「古歌云、薄霧の籬の花の(中略)／又云、色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける(問答第八条)」

4、「又云、ことごとく物数を極めずとも、仮令、十分に七八分極めたらん上手の(中略)しかも工夫あらば、これ又、天下の名望を得つべし。さりながら、十分に足らぬ所あらば、都鄙・上下におひて、見所の褒貶の沙汰あるべし」(奥義)

5、「又云、十体を知らんよりは、年々去来の花を忘るべからず。(後略)」(別紙第四条)

ただし、経書の注釈や禅籍の「又曰」「又云」は、直前部分における一書や一人の言の引用を受け、重ねて同書同人の言を引用する場合に用いるのを基本とする。たとえば『夢中問答集』における次の例、

般若・三昧経に云はく、心を以ても仏を得べからず、色を以ても仏を得べからず。又云、はく、身を以て得るにもあらず、智慧を以て得るにもあらずと云々。

が本来の意味に沿っている。これに対し、世阿弥の用法でそれに準ずると言えるのは右3の例だけである。他例はみな本来の意味から外れており、ことに自説を掲げる際に「又云」を用いる点に、世阿弥独自の特徴がある。この独自の用法は、従来指摘されてきたように「公案」が本来の意味で用いられていないことと共通するものであろう。

ところで、世阿弥と禅文化とのかかわりについては、かつて香西精氏が「ふかかん寺二代」『世阿弥の禅的教養』(『世阿弥新考』所収)等に論じられて以来、近年でも、氏の研究がこの分野の「到達点」であるとの認識がある(天

野文雄氏「世阿弥と禅——『六祖壇経』をめぐる」(『解釈と鑑賞』65—10)等。確かに、世阿弥の伝書や能の作品から禅にかかわる言葉や影響の大きさは、今でも色褪せていない。しかし、世阿弥の禅の知識教養を曹洞宗と強く結び付ける理解は、今は見直されるべきではなからうか。このことについてはすでに落合博志氏が「世阿弥のいる場所 禅的環境——東福寺その他」(『國文學』35—3)に、

補巖寺(「世阿弥の過去帳が残される曹洞宗の寺、筆者注」は大和の寺院であり、京都に住んで主に將軍家や諸大名との関りの中で生活していた世阿弥にとっては、日常的には(中略)岐陽方秀との交渉の方がより重要であつたとも想像しうる。

と述べておられる。筆者は、右落合氏稿がこの分野に関する新しい見解を提示した、香西氏以来の「到達点」であると認識している。

香西氏が指摘されたのは、世阿弥の禅的教養の典拠が曹洞宗の書だという点である。しかし今注意すべきは、世阿弥が必ずしもそのような書を直接読んだとは限らないことである。博学の方秀の読書量に比べれば、世阿弥のそれが取るに足らないものであつたことは明白であり、通読した書があつたかどうかもわからない。世阿弥の儒学や禅の知識が誤字を伴うことから、そのように解される。

そして同時に留意すべきは、世阿弥と交流のあつた方秀をはじめ、当時のとくに臨済宗

の僧には、大陸文化に通じていた人が少なからずいたことである。方秀も、少なくとも経書・韻書と禅の類書(『景德伝灯録』等)には広く目を通していたことが窺われ、そのような人物の話の内容に、書物や他者との会話によつて得た様々な知識が混じていたことは想像に難くない。儒学説も話題に上つたろうし、曹洞宗説についての会話が交わされたかもしれない。世阿弥が知識を得る場が主にこのようであつたと捉えれば、その禅的教養の「典拠」は容易には決められないし、曹洞宗説が見えるからと言つて、それを世阿弥の曹洞宗への帰依とすぐに結び付けることはできない。先述した「又云」も、禅籍と経書の注釈のいずれに由来するとも言い難い。

香西氏は、禅籍に拠つた『盛久』の「無中に道あつて塵埃を隔つ」について、末尾を「隔つ」とするのは曹洞宗であり、当時の臨済宗ではそこを「出づ」とする本文を採つていたとして、これを世阿弥に曹洞宗色が濃い根拠の一つに挙げておられる。しかし、この句は宋の臨済宗大慧派の僧晦巖智昭の撰述に係る『人天眼目』の第三にも見えており、同書の五山版では「出づ」「隔つ」の両種の本文が引かれて注目される。同書の注釈に方秀の『人天眼目不二鈔』(現所在不明)があることも看過できない。香西氏は世阿弥と曹洞宗とのかわりを示すもう一つの例として、『花鏡』の「混ぜず」という表現が、曹洞宗の僧峨山韶碩の『山雲海月』に見える「不混」に

拠つたことを挙げておられるが、これについても、世阿弥が臨済宗の僧を介して知り得た可能性がないとは言ひ切れまい。ちなみに、「不混」は韶碩独自の表現である可能性が高いが、その典拠は、経書の一である『周易』第七「繫辭上」の次の注釈にあると推測される。太極、天地未分の前を謂ふ。元の氣混じて一と為る。即ち是れ太初太一なり。故に老子云はく、道一を生ず。即ち此の太極是れ「道。筆者注」なり。

『正義』。原文を書き下し文に改めた)世阿弥と禅文化とのかかわりについては、補巖寺を無視するわけではないが、やはり臨済宗の僧との交流を基本と見るのが自然である。そもそも右の『人天眼目』は禅の五家の宗要を説いた書であり、そこには香西氏が注目された曹洞宗の「五位」説も掲げられている。このように宗派を超える点において同書は、世阿弥の「初心忘るべからず」とのかかわりが推測される『宗鏡録』(やはり五山版として出版された)と同様である。世阿弥の禅文化とのかかわりを捉えるためには、禅籍という遺物から「典拠」を求めようとする前に、我々はまず当時の臨済宗の僧の知的世界の広さについて学ぶべきではなからうか。そうするうちに、おのずと着目すべき「資料」も絞られてくるはずである。「能楽」を狭い枠で囲うことなく、学術的にも開かれた視野を持つことが重要であると考える。

(立命館大学アトリリサーチセンター研究員)